

日本僧伝文学の研究史と課題

——古代・中世を中心に——

石橋 義秀

一、はじめに

日本の僧伝文学は、古代・中世・近世を通じて、大きな流れをなしており、仏教文学の世界においても看過できない研究対象と考えられる。しかしながら、現在、日本僧伝文学について本格的に取りあげた研究書は全く見られない状態であり、仏教文学や説話文学、あるいは仏教説話関係の研究書に付随的にその研究が見られるに過ぎない。また、日本僧伝文学の概念規定や範疇について、研究者の間でまだ十分に議論がなされておらず、曖昧な状態のまままで今日に至っている。

小稿では、日本の僧伝文学についての現在までの研究状況をたどりつつ、問題点と今後の課題を私なりにまとめてみたいと思う。

僧伝文学を仏教文学を研究する対象の一つとして、その位置づけ

を試みたのは筑土鈴寛氏である。筑土氏は「仏教文学研究——特に

法儀の文学について——」（岩波講座日本文学、昭和六年九月）の中で、

1 聖典及び翻訳文学・註釈文学、2 碑文銘記類、3 仏教歌謡、4 法

儀文学の次に、5 僧伝文学を挙げ、「往生伝、高僧伝、発心集、閑

居友の如き」ものを該当する作品と考えている。つまり氏は、僧伝

文学を独自のジャンルとするのではなく、仏教文学の中の一群と把

えたのである。これを継承・発展させたのは永井義憲氏である。永

井氏は『日本仏教文学研究』（古典文庫刊 昭和三二年三月）および『日

本仏教文学』（塙書房刊 昭和三八年一〇月）両書の「日本仏教文学の

対象」を論ずる章において、筑土氏の見解を引用し、「（1 聖典及び翻

訳文学・註釈文学）4 法儀文学の各項について解説した後、5 僧伝文学の

項で、『日本往生極楽記』をはじめとする往生伝類、『日本高僧伝要

文抄』・『元亨釈書』などの僧伝を取りあげ、筑土氏の説に解説を加えている。ただし、『発心集』『閑居友』は、僧伝の資料もふくまれているが仏教説話として扱うべきであろう。」と訂正する。

その後、注意すべきは菊地良一氏の研究である。菊地氏は『中世説話の研究』（桜楓社刊 昭和四七年四月）の「第二部 僧伝文学における説話形成」において、古代僧伝と中世僧伝について主として説話形成の面に焦点をあてて論究する。まず第一章において、古代僧伝を初期の個人僧伝（『唐大和上東征伝』など）と集成僧伝（『延暦僧録』など）に分類し、具体例を示す。第二章で、平安時代に編纂された『日本霊異記』・『三宝絵詞』・『今昔物語集』などの説話集、『日本往生極楽記』などの往生伝類に見られる僧伝を説話系僧伝と命名し、それら諸書に記された古代僧伝の性格について概説する。次に、中世僧伝については、第四章で、法然・親鸞・一遍・道元・日蓮等の鎌倉仏教の祖師たちの伝記（あるいは、その門下の派祖の伝記）について述べる。特に浄土宗諸派の祖師たちの伝記（浄土系僧伝）が盛んに作られ、古代僧伝とは異なる中世僧伝としての特色を顕著にする（浄土系僧伝に比べて、その他の諸宗には見るべきものが少ない）と記し、また、集成僧伝は中世においては低調で、本格的なものとして『元亨釈書』があるに過ぎないと指摘する。その後、中世の僧伝書目を列記し、第五章～第八章において、喜海『梅尾明恵上人伝』

（附『解脱上人伝』）、耽空『本朝祖師伝記絵詞』、覚如『本願寺聖人親鸞伝絵』、聖戒『一遍聖絵』について詳細に論述する。

その他に、僧伝文学について、概念規定や範疇等を論じた研究は見られない。僧伝文学の範囲を、菊地氏がいう古代の個人僧伝、集成僧伝、説話系僧伝、中世の各宗派の祖師伝・絵伝のほか、近世の高僧伝（『本朝高僧伝』・『延宝伝燈録』など）、往生伝（『扶桑寄帰往生伝』・『日本古今往生略伝』など）、各宗派の祖師の伝記類など、広く考えておくのがよい。

以下、古代・中世の僧伝文学の中から、特に問題になるとと思われるものについて、その研究状況と課題を記す。なお、個々の研究論文については省略し、単行の研究書類を中心に取りあげることにとしたい。

二、古代僧伝

(1)

古代僧伝の中で、先ず問題にすべきは、『唐大和上東征伝』などの個人僧伝である。『東征伝』は、鑑真没後の宝亀一〇年（七七九）に成立したものであるが、それは鑑真の史実的な伝記であり、のちの説話系僧伝などに見られる霊驗・奇瑞の類は記されていない。鑑

真伝の研究は、石田瑞麿氏・安藤更生氏らにより昭和三十年代から四十年代にかけて盛んに行われた。すなわち、仏教学の立場からの研究として、石田瑞麿著『鑑真——その思想と生涯』（大蔵出版社刊 昭和三年三月）、『日本仏教における戒律の研究』（在家仏教協会刊 昭和三八年三月）、『鑑真——その戒律思想』（大蔵出版社刊 昭和四九年一月）、鑑真の伝記を中心とする研究として、安藤更生著『鑑真大和上伝之研究』（平凡社刊 昭和三五年八月）、『鑑真』（美術出版社刊 昭和三八年六月）、『鑑真』（人物叢書・吉川弘文館刊 昭和四二年一〇月）、安藤更生・亀井勝一郎共編『鑑真和上』（春秋社刊 昭和三八年一月）などがある。特に安藤氏の『鑑真大和上伝之研究』は、鑑真在唐時代の伝記について、唐土資料により詳細に検討を加える。さらに（本文のあとに）註・細註が施され、厳密で詳細な考証がなされている。鑑真来日後の伝記については後著（『鑑真』）で論述する。なお、共編の『鑑真和上』は、鑑真についての記念論文集、現代語訳『唐大和上東征伝』などを収録する。安藤氏の研究の後、注目すべきものは蔵中進著『唐大和上東征伝の研究』（桜楓社刊 昭和五年七月）である。本書は文献学的・文学的立場からの研究であり、『東征伝』の書名、諸本、撰者、文章と表現、訓読などの諸問題について、また『延暦僧録』との関係などについて、種々の角度から研究されている。さらに巻末部に二種の倭訓索引、綿密な校本を収録しており、

『東征伝』の総合的な研究書であり、鑑真伝の画期的研究といえよう。なお、蔵中氏架蔵の宝暦十二年版本を影印、訓読文と解説を付し、入手しやすいテキストとして出版する（和泉書院・影印叢刊12 昭和五四年一月）。その他、日本名僧論集の第一巻として、平岡定海・中井真孝編『行基・鑑真』がある（吉川弘文館刊 昭和五八年三月）。鑑真に関する重要な論文（塚本善隆「中国仏教史上に於ける鑑真和上」など）八編が収められ、解説と主要参考文献が付されている。（ちなみに、鎌倉時代に良観上人忍性の企画により制作された『東征伝絵巻』（唐大和上東征伝）の絵巻物の複製が『日本絵巻物全集』21（角川書店刊 昭和三九年四月、〈新修版 五三年七月）に収められ、亀田孜氏の論文「東征伝絵巻について」などが集録されており、参考になる。）

鑑真と並ぶ名僧は、文殊の化身とされ、菩薩と仰がれた行基である。戦後、多くの古代史研究者の間でいろいろな角度から行基について論じられている。ただし、行基を標榜した研究書類は少ない。井上薫著『行基』（人物叢書・吉川弘文館刊 昭和三四年七月）と、前記の『行基・鑑真』（日本名僧論集・第一巻）の二冊にすぎない。その他は、日本古代史・古代仏教史の研究書の中で、行基が取りあげられ、論じられているのである。主要なものを列挙すると、二葉蕙香著『古代仏教思想史研究』（永田文昌堂刊 昭和三七年九月）、鶴岡

静夫著『日本古代仏教史の研究』（文雅堂刊 昭和三七年九月）、同『古代仏教史研究』（文雅堂刊 昭和四〇年六月）、井上光貞著『日本古代の国家と仏教』（岩波書店刊 昭和四六年一月）、中井真孝著『日本古代の仏教と民衆』（評論社刊 昭和四八年九月）、朝枝善照著『平安初期仏教史研究』（永田文昌堂刊 昭和五五年三月）、堀池春峰著『南都仏教史の研究 上』（法蔵館刊 昭和五五年九月）、井上光貞著『日本古代思想史の研究』（岩波書店刊 昭和五七年三月）などである。それから研究書には、大雑把に言つて、行基の宗教活動や、行基と国家との関係等が歴史学の立場から論じられているが、行基の伝記について、特に国文学の立場から取り組んだ研究は見られない。なお、小山田和夫編「行基関係研究文献目録」（『政治経済史学』一三三 昭和五二年六月）に昭和五〇年までの行基を主題とした文献（一八〇編）があげられており、研究状況を知る上で大変参考になる。

古代の個人僧伝のうち、代表的な名僧、鑑真と行基の研究状況を述べたが、その他の名僧・高僧について論述する余裕はない。ただ、周知のことであるが、吉川弘文館の人物叢書に、『鑑真』・『行基』のほか、『最澄』（田村晃祐著 昭和六三年二月）、『良源』（平林盛得著 昭和五一年二月）などが収録され、また吉川弘文館の日本名僧論集に、『最澄』（塩入良道・木内亮央編 昭和五七年二月）、『空海』（和多

秀乗・高木神元編 昭和五七年一二月）、『源信』（大隅和雄・速水侑編 昭和五八年六月）などが収録されていることを付記するとどめる。

(2)

次に問題にすべきは、説話系僧伝の中でも、極楽浄土に往生を遂げた人々の伝記を集めた往生伝である。往生伝は、古代の個人僧伝や集成僧伝とは目的が異なり、（純然たる僧伝書とはいえないが）行歴事蹟を中心とする僧伝書の変形したものと考えることができ。わが国の往生伝は平安時代中期（寛和年間に成立）の『極楽記』に始まり、近世にいたるまで作られるが、最も盛んに編纂されるのは院政期である。平安朝に作られた往生伝（『極楽記』の他、『続本朝往生伝』・『拾遺往生伝』・『後拾遺往生伝』・『三外往生記』・『本朝新修往生伝』・『高野山往生伝』）は共通点が多く、その研究は一括して行われている。往生伝ではないが、平安後期（長久年間）に法華経の靈験を記す目的で法華持経者（受持者）の伝記などを集録した『法華験記』の場合も、往生伝に類似する内容をもつものであり、僧伝書の変形と考えてよい。従つて、往生伝と一緒に取り扱うことにしたい。

往生伝関係の研究書を紹介する。先ず仏教学や歴史学（特に日本仏教史学）の立場から、日本浄土教の研究を目的として往生伝類に言及したものとして、石田充之著『日本浄土教の研究』（百華苑刊

昭和二十七年一〇月)、井上光貞著『日本浄土教成立史の研究』(山川出版社刊 昭和三二年九月〔新訂版〕 昭和五〇年二月)がある。石田氏の研究は平安朝の浄土教を考える上で往生伝を取りあげ論じたものであり、井上氏の研究は往生伝類の成立の社会的・思想的背景や、聖・沙弥の宗教活動等について詳述したものである。続いて、重松明久氏は『日本浄土教成立過程の研究』(平楽寺書店刊 昭和三九年三月)において、前記、井上氏の研究を土台にして、第二編・往生伝よりみた浄土教の展開で、(1)『極楽記』・『法華験記』等の七種の往生伝の成立事情、出典、引用関係等を考察し、(2)七往生伝にみられる往生人の行業について分析し、その類型を坐禪・念仏・法華・観音の四つに分類し、(3)その類型的研究を踏まえて平安時代往生人の二つの道(出家的往生思想・俗人的往生思想)を明らかにした。重松氏の目標は「親鸞の思想と源流」にあり、往生伝の研究が主たる目的ではないが、七往生伝(『法華験記』を含めることについて異論はあるが)について全構成的に検討し、往生人の行業という宗教生活の実態の分析に重点を置いて研究し、前記の両書に見られない成果をあげたといえる。同類の研究(仏教学・日本仏教史学の立場からの研究)は、以上の他、石田瑞麿著『浄土教の展開』(春秋社刊 昭和四二年一月)、同『往生の思想』(平楽寺書店刊 昭和四三年一〇月)、高木豊著『平安時代法華仏教史研究』(平楽寺書店刊 昭和四八年六月)、伊藤真徹

著『平安浄土教信仰史の研究』(平楽寺書店刊 昭和四九年三月)、笠原一男著『女人往生思想の系譜』(吉川弘文館刊 昭和五〇年九月)などがあり、種々の角度から研究されており、いずれも参考にすべき論考といえよう。

国文学の立場から研究した最初のもは、古典遺産の会編『往生伝の研究』(新読書社刊 昭和四三年五月)である。その内容は、往生伝に関する論文(菊地良一「往生伝における教理と説話形成について」など12編)と、高橋貢「往生伝関係研究文献目録」、関口忠男他「往生伝類解題」から成る。従来の(仏教学・仏教史学等の)研究成果を踏まえて、撰者・成立・享受・伝承等の諸問題について、共同で検討を加え、往生伝の文学的特質を究明しており、往生伝研究の基礎を築いたものであり、後の研究に大きな影響を与えたといえよう。

これに続く研究として、志村有弘著『往生伝研究序説』(桜楓社刊 昭和五年一月)がある。特に、第一部・往生伝研究序説において、往生伝の特質と文学性、往生伝の系譜を論述し、平安朝の七往生伝のほか、『三井往生伝』・『念仏往生伝』について、編者・成立・内容等の基礎的な問題を考察しており、国文学の立場からの研究として貴重なものである。

往生伝を研究する際の基本的な研究文献として、井上光貞・大曾根章介校注『往生伝・法華験記』(日本思想大系7 岩波書店刊 昭和

四九年九月)がある。本書には十篇の文献を収録するが、『極楽記』、『法華験記』等の五篇については、訓読文を本体として注解を加え、原文と校異を別に掲げる。その他(『後拾遺往生伝』等)の五篇は、参考として原文のみを収録する。巻末に詳細な文献解題と諸本解題を付載する。必携の書といえよう。その他、注意べきものとして、平林盛得著『聖と説話の史的研究』(吉川弘文館刊 昭和五六年七月)がある。往生伝類・説話集に見られる聖の行業に着目し、平安中期の聖の実態を明らかにしたもので、歴史学と文学とを結びつけた研究といえる。すなわち本書は四部から成るが、第一部で叡山中興の祖良源と増賀・性空・高光等のかかわりを論じ、第二部で叡山中興と聖、空也・行円等の市中での行業と史的意義を考察し、第三部で教信・餌取法師・増賀等の説話について比較検討しており、いずれも聖を中心とする実証的な研究であり、僧伝文学研究の一つのあり方を示すものである。

往生伝類のほかに、説話系僧伝として、菊地良一氏は『靈異記』・『三宝絵詞』・『今昔物語集』などの仏教説話・説話文学に見られる僧伝説話を指摘する(前掲『中世説話の研究』)。たしかに『靈異記』には聖徳太子や行基などの行蹟や靈験などを記し、それを承けて、『三宝絵詞』にも(特に中巻に)聖徳太子をはじめ行基など十八人の僧

俗の伝記的説話が見られる。さらに『今昔物語集』の場合、巻十一の(1)・聖徳太子(12)・智證大師の十二話をはじめ、本朝仏法部に僧伝説話が数多く散在する。特に巻十五には五十四の往生伝的説話があり、『今昔物語集』には僧伝文学的要素が濃厚に見られる。以上の如き仏教説話集を僧伝文学として取り扱った研究は菊地氏の前掲書の他には殆んど見られない。ただし、『靈異記』・『三宝絵詞』・『今昔物語集』等に登場する僧尼の出自・事蹟・靈験・往生などについて、伝記的な面に重点をおいて研究した論考は少なくない。今、それら研究論文等についていちいち指摘する余裕はないが、一例として、『今昔物語集』巻十五に関する研究を紹介しておく。巻十五の本格的な研究は黒部通善氏(『今昔物語集巻十五考(一)』・『名古屋大学国語国文学』七・一四 昭和三五年二月・三九年四月)に始まるが、池上洵一氏(『往生伝の系譜と今昔物語集巻十五(上)』・『日本文学』二二・一一・一二 昭和三八年一月・二月)や伊藤真徹氏(『わが国往生伝史上より見た『今昔物語集』作者の性向』・『仏教大学研究紀要』五一 昭和四二年三月)の研究により、往生伝とのかかわりがより明確にされた。その後、中野猛氏(『今昔物語集巻十五の編纂意識について』・『言語と文芸』九一四 昭和四二年七月)や石橋義秀(『日本往生極楽記』と『今昔物語集』巻十五)・『大谷学報』五〇―三 昭和四六年一月)、『今昔物語集』巻十五の再検討)・『文藝論叢』一八 昭和五七年

三月)などの研究があり、往生伝の影響関係その他について、研究が進められている。(なお、『今昔物語集』の研究状況については、石橋義秀著『仏教説話研究(附『今昔物語集』研究文献総覧)』善正寺刊 昭和四九年一月、および大村誠一郎『今昔物語集研究文献目録』・『講座平安文学論究・第四輯』風間書房刊 昭和六二年六月を参照していただきたい。)

〔附記〕前掲『往生伝 法華験記』(日本思想大系7)に、大江匡房撰『本朝神仙伝』が収められている。往生伝とは性格を異にする神仙の伝記であるが、『神仙伝』二十九人の過半が仏教の僧尼(或いは仏教信者)であり、僧伝文学的要素が濃厚といえよう。説話系僧伝に含めて考えていく必要があると思う。なお『神仙伝』は日本思想大系本の他、日本古典全書にも収められている。(『古本説話集・附本朝神仙伝』朝日新聞社刊 昭和四二年九月)。

三、中世僧伝

前述の如く、菊地良一氏は、中世僧伝の中心は浄土系僧伝で、その他の諸宗には見るべきものが少ないといわれる。しかし、栄西・道元・日蓮、あるいは解脱・明恵など、取りあげなければならぬ僧伝が数多くある。ただし、今回は中世僧伝の中でも特に重要と思われる法然・親鸞・一遍に限定して、その研究状況を概観したい。

(1)

法然の伝記研究で、基礎的な文献というべきものは、井川定慶編『法然上人伝全集』(法然上人伝全集刊行会刊 昭和二七年九月(増補再版)昭和四二年九月)である。『四十八巻伝』をはじめ、現存の法然伝および関係資料を網羅し、集成したもので、第一集・勅伝、第二集・伝法絵、第三集・雑と抄から成り、資料的価値が高い。『法然上人伝全集』の続編として『法然上人絵伝の研究』(法然上人伝全集刊行会刊 昭和三六年三月)がある。本書は『同・全集』の研究編であり、別伝・伝法絵・弘願本・古徳伝・勅伝・掛幅装・余録に分けて詳細に検討し、その成立等について論究する。後篇に年表・索引・目録を収めてあり、法然絵伝の総合的研究といえよう。前後するが、田村圓澄著『法然上人伝の研究』(法蔵館刊 昭和三二年五月(新訂版 昭和四七年五月))は第一部・法然研究の展望、第二部・法然とその教団、第三部・法然伝の諸問題より成る。田村氏は法然の行状を分類し、中世に製作された数多い法然伝を類別し、その記事内容を比較検討して歴史的な法然像の解明を試み、いくつかの新説を提示した。また、同氏の『法然』(人物叢書・吉川弘文館 昭和三四年一二月)は学問的成果を盛りこんだ法然伝記である。

法然伝研究の集大成というべきは、法然上人伝研究会編『法然上人伝の成立史的研究(一)~(四)』(知恩院刊 昭和三六年三月、三十七年三月)。

四月、四〇年三月）である。第一巻―第三巻は『四十八巻伝』を中心にして諸伝記と厳密な比較対照した「対照篇」で、第四巻は「研究篇」で法然に関する論文が収録されており、画期的な研究である。

この法然上人伝研究会のメンバーである三田全信氏は、右記の研究を発展拡充させ、『成立史的法然上人諸伝の研究』（光念寺出版部刊 昭和四一年五月〈再版〉平楽寺書店 昭和五一年一月）を公刊した。

本書は法然伝がどのような史料で構成されたかについて分析し、さらに新史料を加えて記事内容が漸増していく過程を詳細に論述する。三田氏には『浄土宗史の諸研究』（山喜房仏書林刊 昭和三四年一月〈改訂増補〉昭和五五年三月）、『浄土宗史の新研究』（隆文館刊 昭和四六年一月）があり、法然伝についても詳しく検討し論究する。その他、赤松俊秀著『続鎌倉仏教の研究』（平楽寺書店刊 昭和四一年八月）、大橋俊雄著『法然——その行動と思想——』（評論社刊 昭和四五年一月）、伊藤唯真著『浄土宗の成立と展開』（吉川弘文館刊 昭和五六年六月）、伊藤唯真・玉山成元編『法然』（吉川弘文館刊 昭和五七年一〇月）、大正大学・仏教大学編『法然浄土教の総合的研究』（山喜房仏書林刊 昭和五九年三月）などにも法然伝についての研究がうかがえる。

以上は仏教史学あるいは浄土学の立場からの研究が中心であるが、美術・絵画の方面からの研究として、『日本絵巻物全集』13『法

然上人絵伝』（角川書店刊 昭和三六年五月〈新修版〉昭和五二年七月）と、『続日本絵巻大成』1-3『法然上人絵伝（上・中・下）』（中央公論社刊 昭和五六年五月―九月）がある。前書『全集』は、『四十八巻伝』の絵全巻をグラビア版にし、詞書を翻刻する。巻末に編者塚本善隆氏の「四十八巻伝と知恩院」など、諸家の論考（解説）が付されている。後書『大成』も『四十八巻伝』を全巻複製し、詞書釈文をつける。下巻に編者小松茂美氏の詳細な解説「『法然上人絵伝』総観」が付載されている。その他、真保亨編『法然上人絵伝』（『日本の美術』95 至文堂刊 昭和四九年四月）には七種の絵伝についての詳しい解説が見られる。

なお、仏教史研究会編「法然関係史学論文目録」（『三康文化研究所年報』12 昭和五五年三月）の「法然 伝記」の項に掲載されている論文は約百八十編をかぞえるが、大部分は仏教史学の立場からの研究であり、文学的研究はほとんど見られない状況である。

(2)

親鸞伝研究として先ずあげるべきは、日下無倫著『総説親鸞伝絵』（史籍刊行会刊 昭和三三年一月）である。本書は昭和一四年真宗大谷派安居講本『本願寺聖人伝絵講要』（上下二巻）を増補訂正して一卷にまとめたものであり、前編は『親鸞伝絵』の著者、製作の意

趣、歴史的展開、題号などの諸問題についての研究・解説が中心で、後編は『親鸞伝絵』上下十五段について、各段ごとに本文・語釈・大意・論考の四に分けて論述されている。異本の収録、本文解釈の詳細な点で今日でも価値を有する研究である。また藤原猶雪著『親鸞聖人伝絵の研究』（法蔵館刊 昭和二十九年九月、同年の真宗大谷派安居講本『本願寺聖人伝絵証註序説』の再版）がある。本書は、主として西本願寺本の史的価値およびその流伝などを論じ、『伝絵』をめぐる諸問題について論述する。

その後、宮崎円遵氏と赤松俊秀氏の研究が注目される。宮崎氏の『親鸞とその門弟』・『続親鸞とその門弟』（永田文昌堂刊 昭和三十一年九月、三六年六月）は、親鸞の生涯や門弟について諸方面から考察した論文集である。また『初期真宗の研究』（永田文昌堂刊 昭和四十六年九月）、『真宗の歴史と文化』（教育新潮社刊 昭和四十九年九月）にも親鸞伝に関する論考が収録されており、宮崎氏独自の新しい見解が示されている。さらに安居講本『本願寺聖人親鸞伝絵私記』が宮崎氏逝去直後に刊行された（永田文昌堂刊 昭和五十八年七月）。本書は「伝統の述作と周辺」「伝絵述作の意趣」「伝絵古写三本」「絵伝の種々相と絵解」より成る。一方、赤松氏は、『鎌倉仏教の研究』・『続鎌倉仏教の研究』（平楽寺書店刊 昭和三十三年八月、四一年八月）の「親鸞をめぐる諸問題」において、『親鸞伝絵』について論究する。

また『親鸞』（人物叢書・吉川弘文館刊 昭和三十六年四月）は、著者の永年にわたる研究成果を取り入れた親鸞伝記である。さらに安居講本『本願寺聖人伝絵序説』（真宗大谷派出版部刊 昭和四十八年六月）は「伝絵研究の課題」「永仁初稿本の原態」「伝絵各説」より成る。日下無倫氏の研究をふまえて、独自の見解を示す。その他、梅本真隆編『御伝鈔の研究』（永田文昌堂刊 昭和四十二年六月）、宮地廓慧著『親鸞伝の研究』（百華苑刊 昭和四十三年一月）がある。前書は、梅原氏ほか眞学苑同人が東本願寺蔵康永本を底本にし、各段ごとに註釈・大意・解説を加えたものであり、後書は「親鸞聖人伝の諸問題」などの論考を収録した論文集である。

なお、東本願寺蔵康永本『本願寺聖人伝絵』（四巻）の複製が出され（真宗大谷派宗務所刊 昭和三十九年三月）、藤島達朗「『本願寺聖人伝絵』について」と赤松俊秀「親鸞聖人伝絵諸本について」の解説がつけられた。また『日本絵巻物全集』20『善信聖人絵・慕婦絵』（角川書店刊 昭和四十一年五月（新修版）昭和五十三年五月）が出版され、巻末に編者宮崎円遵氏の「善信聖人・慕婦絵の成立とその事情」などの論考（解説）が付されている。いずれも貴重な資料であり、付載の解説は参照すべきものである。

* * *

(3)

時衆、一遍に関する研究で注目すべきは、金井清光氏と大橋俊雄氏の一連の業績である。金井氏は時衆研究の基礎となる労作『時衆文芸研究』（風間書房刊 昭和四二年一月）をまとめ、論文編・資料編ともに後の研究に多大な影響を与えた。そのうち『時衆と中世文学』（東京美術刊 昭和五〇年九月）および『一遍と時衆教団』（角川書店刊 昭和五〇年三月）を出版した。前書は『時衆文芸研究』に続くもので、論文編・資料編より成るが、『一遍聖絵』の文学など参照すべき論考が収められている。後書は「一遍の生涯と宗教」「真教の時衆教団形成」「遊行派の成立と展開」「時衆十二派」「六十万人知識と遊行派」より成るが、文献資料を博搜した時衆教団についての実証的な研究であり、一遍の伝記についても詳細に論述する。この他、金井氏には『時衆教団の地方展開』（東京美術刊 昭和五八年五月）があり、「宗教家としての一遍」など一遍関係の論考が収録されている。一方、大橋俊雄氏は『一遍——その行動と思想——』（評論社刊 昭和四六年八月）で、一遍の生涯を『一遍聖絵』・『一遍上人語録』によりながら、当時の社会状態を考慮してその行歴をまとめている。また、『時宗の成立と展開』（吉川弘文館刊 昭和四八年六月）の第一章・一遍智真と時衆において、一遍の伝記について詳細に論述する。さらに大橋氏は『一遍と時衆教団』（教育社刊 昭

和五三年一〇月）の「一遍とその教団」の章で、求道者・遊行僧としての一遍について論じ、『一遍』（人物叢書・吉川弘文館 昭和五八年二月）においては、『聖絵』と『絵詞伝』を軸に諸説をふまえて一遍の伝記を総括する。

金井・大橋両氏に先立つ研究として、吉川清著『時衆阿弥教団の研究』（池田書店刊 昭和三一年五月）があり、第二編・一遍房智真の時衆教団と阿弥に、「一遍伝の諸史料」をはじめ、「一遍上人絵詞伝成立考」など、一遍の伝記に関する考察が見られる。その他、橘俊道著『時宗史論考』（法蔵館刊 昭和五〇年三月）、栗田勇著『一遍上人——旅の思索者』（新潮社刊 昭和五二年九月）、越智通敏著『一遍——遊行の跡を訪ねて——』（愛媛文化叢書刊行会刊 昭和五三年四月）、橘俊道・圭室文雄編『庶民信仰の源流——時宗と遊行聖——』（名著出版刊 昭和五七年六月）、金井清光・梅谷繁樹著『一遍語録を読む』（法蔵館刊 昭和五九年九月）などにも一遍伝についての考察・研究が見られる。

以上のほかに、美術・絵画の方面からの研究として、『日本絵巻物全集』10『一遍聖絵』、『同 全集』23『遊行上人縁起絵』（角川書店刊 昭和三五年七月、四三年九月〈新修版〉 昭和五〇年九月、五四年九月）がある。両書の巻末には編者（望月信成、宮次男・角川源義）らの論文（解説）が付されている。また『日本絵巻大成』別巻『一遍

上人絵伝』(中央公論社刊 昭和五年一月)があり、編者・小松茂美氏らの詳細な解説がつけられている。宮次男編『一遍上人絵伝』(『日本の美術』56 至文堂刊 昭和四六年一月)も参照すべき研究である。

中世僧伝のうち、法然・親鸞・一遍の伝記的研究を私なりに紹介したが、取りあげるべき研究を見落すなどの不備が多いことである(同様のことは古代僧伝についてもいえる)。今後、そのような不備を補正すると同時に、今回、全く触れることができなかった高僧・名僧(栄西・道元・日蓮など)の伝記研究についても検討したい。また、中世の集成僧伝、『元亨釈書』(あるいは『真言伝』など)につい

ても考えなければならぬ。

* * *

「日本僧伝文学の研究史と課題——古代・中世を中心に——」という大きなテーマを掲げたが、調査が進まず不十分な結果に終わった。

[特に、旧稿「僧伝文学研究の軌跡と展望」(『国文学解釈と鑑賞』五一—九 至文堂刊 昭和六一年九月)を大幅に書きかえるつもりであったが、その通りにいかなかった。]

今後、近世の僧伝文学も含めて、研究状況をまとめ、日本僧伝文学全般にかかわる問題を解明していきたい。予定の紙数に達したので、残された多くの宿題については別の機会に発表したく思う。